

当事者ヒアリング結果 対象者の概要

資料 1

項番	性別	対象者の健康状態	家族構成	家族や親族のサポート	子の就園等の状況	主な民間サービス等の利用
子育て当事者①	女性	心身の疾患あり、内服治療中	本人 夫 息子2人（小学校 中学年、2歳）	夫は勤務地は近隣 同じ市内に住む義 母の支援あり 実家は遠方	第一子：小学校（軽度 自閉症により個別学級・ 交流級を利用） 第二子：就園中（保育 所）	地域子育て支援拠 点
子育て当事者②	女性	精神疾患あり 内服治療中	本人 夫 息子2人（4歳、2 歳） 娘1人（3か月）	夫は多忙 実父母は他界 義父母は遠方にい るがサポートは得ら れる	第一子：就園中（保育 所） 第二子：就園中（保育 所） 第三子：待機児童 ※第一子、第二子は異 なる保育所に通園中	ホームス タート
子育て当事者③	女性	精神疾患あり 内服治療中	本人 夫 息子（1歳3か月）	夫の帰宅は比較的 早い 実父母は他界 義父母には就園等 の状況を共有して いない	第一子：就園中（保育 所）	ホームス タート

当事者ヒアリング結果概要

<就園や行政や民間・NPO等のサービス利用に至る前の状況>

・ 就園前の状況と就園のきっかけ

- 保護者本人の心身に疾患がある事例では、保健師や家族等からの助言をきっかけに、育児の負担を減らす目的で就園につながっていた。
- 一方、こどもに障害がある事例では、他の子と発達を比べられること、施設見学等での入園拒否が、就園の意思決定の阻害要因になっていた。
 - 第一子は幼稚園で2年保育を利用した。2年保育としたのは、こどもがかわいくて家庭で育てたかったこと、また、他の子と発達の遅れを比べられることを懸念していた（3か月程度の早産児として出生し、軽度自閉症がある）。入園前に、幼稚園の見学に行ったが、障害がある子は受け入れられないと断られた施設もあり、見学に行くのが怖くなった。就園1年前に児童デイサービス（当時）を利用していた。第二子は、2歳4か月頃に保育所に入園した。疾患の発症により、精神的にも落ち込み、就園直前は育児に行き詰った状態で、主治医に就園をすすめられた。
 - 生後4か月の乳幼児健診で、出産直前に実父が他界したこと等が重なり精神的にきついと保健師に相談し、精神科に通院する意向があれば、疾患を理由に保育所に入園することもできると保健師からすすめがあった。
 - 第一子出産後、ノイローゼ気味になり、ヒステリック状態になる等、喜怒哀楽が激しく、自分で感情の整理ができない状況になっていた。こどもに手を挙げることはなかったが、やり場のない怒りで家電を破壊したり、壁に穴をあける等、物にあたってしまうことがあった
 - 特に大変だった点は、何か窮地に陥ったときに、すぐに連絡ができて頼れる人がいなかったことである。コロナ禍で養育支援関係の事業が休止しており、自ら率先して動かないと以前からの友人以外のママ友がつかれない状況であった。夫から保育所に預けて、休息の時間を設けることを提案された。

・ サービス利用前の状況と利用に至ったきっかけ

- サービス利用前は、孤立、育児への困難さや精神的な不調を抱えており、自治体の保健師からの情報提供をきっかけに、自身で能動的にアクセスすることで継続的なサービス利用につながっていた。
 - 地域子育て支援拠点を知ったきっかけは、妊娠届の際に自治体の保健師から色々なサービスの情報を貰ったことである。遠方から引っ越してきたばかりで、近くに友達も知り合いもない状況で孤独であった。早産で予定日より3か月程早く出産し、しばらくこどもはNICUに入院していた。その間、家に閉じこもった生活が続き、気晴らしが必要と感じていたが、出かける気力はない状態であった。地域子育て支援拠点に一度出向き、引っ越ししてきたばかりで友人がいないこと等を話した。その後、こどもが退院して、自宅で子育てしていたが、早産ゆえにまわりの同じ生まれ月の子の発達と比べて落ち込んでいた。そのタイミングで、地域子育て支援拠点のスタッフから手書きの手紙を貰い、涙が出るほどうれしかった。それをきっかけに定期的に利用するようになった。
 - 乳幼児健診で精神的にきついと自治体の保健師に相談した際に色々なサービスの紹介を受け、さらにこども家庭支援センターで具体的な情報を貰い、ホームスタートの利用を開始した。

当事者ヒアリング結果概要

<就園のきっかけ～登園の状況>

・ 就園の手続き

- 自治体での就園等の相談・手続きに関しては、来所による対面サービスに限定されており、疾患を抱えながら小さい子どもを連れて出向くことに負担があるとの意見があった。
- 就園に向けた具体的なアクション（施設の見学等）を起こすまでには、民間サービス等の支援や後押しがあった。
- 保育所等の選択は、通園の利便性や定員の空き状況の制約等を踏まえて行われていた（必ずしも第一希望の保育所に就園できているわけではない）。

<自治体での就園等の相談・手続き>

- 保育所の入園手続きに関して、行政の保育課のコンシェルジュはあまり有効なものではなかった。保育所の種類等の全体像の基本的な知識もないままであったが、十分な説明はなかった。全体像から細かな事務手続き等の一連の説明を期待していたが、保育所の情報が記載された冊子の配布と、入園に必要な書類の記載方法等の具体的な説明をいきなり受けた。
- 行政への初回の相談に、電話相談は不可で、窓口来所でなければとりあってもらえなかったが、体調が悪い状態で小さい子どもを連れて来所することはかなり負担であった。例えば、訪問等の対応があれば助かると思った。
- 保健師は、一時保育の利用手続きには付き添ってサポートしてくれたが、保育所入園に関する手続きは担当部署が異なるため、サポートしてもらえなかった。

<保育所等の見学>

- 就園前に児童デイサービス（当時名称）を利用する際には、地域子育て支援拠点の職員から心理士、利用者支援事業専任職員を紹介してもらい、初回は日程調整等や付き添いを行ってもらいながら見学もさせてもらった。その後は、すぐに利用を決めなくてもいいし、必要ならまた付き添ってくれると声をかけてもらい、ありがたかった。
- 就園前に、ホームスタートのスタッフに電話で相談し、就園に向けて背中を押してもらった。

<保育所等の選択>

- 当初は、第一子と同じ幼稚園に行かせたい意向があったが、疾患の都合上、自動車の運転ができず、車を利用しなくても登園できる保育所を利用することにした。
- 切羽詰まっている状況で保育所を探していたので、色々な施設を見て比較することができなかった。保育所での空きが少なく、当初は遠方の施設に通った。

当事者ヒアリング結果概要

<就園のきっかけ～登園の状況>

・ 就園による効果・メリット

- 養育者側は、就園によりほっと心が落ち着くといった気持ちを持てるようになっていた。また、持病の体調管理や通院を行いやすくなるメリットがあった。
- こども側は、就園により成長発達が促されることやコミュニティができるというメリットがあった。また、必要時に専門的な支援につながる機会を得られていた。

<養育者側>

- 就園しはじめて、ほっと心が落ち着いている。こどもと家にいると休めないが、就園後は休めることがありがたい。また、こどもを連れて医療機関へ通院することがなくなり負担が軽減した。また、こどもがいないことでカウンセリングも集中して受けることができている。
- 保育所入園後しばらくはほっとしたが、「自分は就労していないのに保育サービスを使ってもいいのか、かといって持病があるため働くことはできないのだが」といった複雑な気持ちがある。
- こどもと物理的に離れる時間ができたことで、心が落ち着いた。

<こども側>

- こどもに体力がついたと感じる。また、保育所で同年齢のこどものコミュニティができたことがよかった。
- こどもは保育所に通い始めた当初は大泣きしていたが、世代の近い子と会うようになったことで、良い刺激をもらい、発達がぐんと進んだ。やりたい意欲が見られるようになり、例えば以前は離乳食を食べさせてもらうだけだったが、就園後は自分で食べるようになった。
- 幼稚園入園後は、リハビリセンターのスタッフが幼稚園を訪問してくれて、こどもの状況を見てリハビリテーションのサービスを紹介してくれる等の支援があった。

当事者ヒアリング結果概要

<就園のきっかけ～登園の状況>

・ 就園に対する本人や周囲の認識とその変化

- 本人は、他者に子どもを預ける不安や、就労していないのに保育所を利用していることへの葛藤を感じる側面がある。
- 家族は、当初、疾患の症状や通院に対して十分理解できていない場合や、反対している場合があった。症状の悪化や、必要時には支援者の助言等により疾患を理由にした就園を理解していた。

<本人の認識と変化>

- 当初は、保育所への抵抗感があり、様子がわからないところに預けているのがどう扱われるかわからないため不安だった。仕事をしておらず、子どもの世話はできる状態なのに保育所へ預けていることに対して、「自分はなにをやっているのだろう」と落ち込むことがあった。保育所に通わせ始めて4か月ほど経つが、まだ違和感がぬぐえておらず、（働いていないのに保育所に通わせるのは）イレギュラーなことだと認識している。
- 保育所入園後しばらくはほっとしたが、「自分は就労していないのに保育サービスを使ってもいいのか、かといって持病があるため働くことはできないのだが」といった複雑な気持ちがある。

<周囲の認識と変化>

- 精神疾患を理由に就園することについて、症状がさらに悪くなり、育児はおろか起きあがることもできない状態になり、保育所を利用する状況にあることを夫が理解できるようになった。
- 夫が精神科通院に否定的な事例では、症状の悪化により育児ができない状態になり、自治体の保健師からの助言や後押しがあったことで夫の理解を得ることができ、通院や就園に至った。

当事者ヒアリング結果概要

・ 現状のサービスの不足点

- 現状の保育所等のサービスについて、就園の準備・手続きについては、担当者の対応と知りたい情報のギャップや、窓口へ出向くことの負担、部署が異なることによるサポートの途切れについて意見があった。
- その他、就園による負担、保育所の送迎に関するサービスの不足、病児保育施設の不足について意見があった。

<就園の準備・手続き>

- 自治体の保育課のコンシェルジュはあまり有効ではなかった。初回の保育所の種類等の基本的な知識がない状態で、保育所入園に関する冊子を渡されて、必要書類の記載方法を説明され、いきなり具体的な話をされた。
- 初回の保育所入所相談の際には、自治体の窓口来所でなければ応じないと言われた。体調が悪い状態で、小さい子どもを連れて来所するのはかなり負担となるため、冷たい対応だと感じた。訪問等の対応があれば子どもが小さいうちは助かる。
- 保健師は、一時保育の利用手続きには付き添ってサポートしてくれたが、保育所入所は担当部署が異なるため、サポートしてもらえなかった。

<就園による負担等について>

- 保育料無償化といっても、施設管理料や教材費等でお金がかかる。
- 幼稚園等の裁縫や手作りカバンの準備等は負担になる。

<自治体と保育所間の情報連携について>

- 自治体と保育所側で情報共有をして、保育所側にも自身の疾患のこと等を知っておいて欲しい。

<保育所の送迎について>

- 子どもが3人いると自転車が利用できず、保育所の送迎が負担になる。

<病児保育について>

- きょうだいの一人が感染症にかかった場合は、原則他のきょうだいに症状がなくても保育所を休まなければならないが、自治体内に病児保育施設が少ない。現在利用している施設は、自宅から遠く、定員枠も少ない。ヘルパーに自宅までスポットで支援に来てもらえる等のサービスがあるとありがたい。自宅に他人が入ることを防犯上ためらう人もいるが、自身の体調管理等を考えると利用したい。

当事者ヒアリング結果概要

<行政や民間・NPO等のサービス利用の効果・課題>

・ サービスを利用したことによる効果

● 悩みや困難を抱えながら子育てをする中で、利用者にとってサービスは有益なものとなっている。

- 家に閉じこもった生活が続き、気晴らしが必要とは感じていたが、出かける気力はない状態であった。地域子育て支援拠点に一度出向き、引っ越ししてきて友人がないこと等を話した。その後、こどもが退院して、自宅で子育てを行っていたが、早産ゆえにまわりの同じ生まれ月の子の発達と比べて落ち込んでいた。そのタイミングで、地域子育て支援拠点のスタッフから手書きの手紙を貰い、涙が出るほどうれしかった。それをきっかけに定期的に利用するようになった。
- ホームスタートの利用により、相談できる人ができたのがよかった。意思決定をする際に、最後に背中を押して貰える人がいる感じである。
- ホームスタートは、家に来てくれるため、こどもの様子が見えたまま預けることが出来る点が良い。
- ホームスタートの訪問員は皆子育てを経験していて、気持ちを分かってくさるのでとても安心できた。親世代の方が来てくれるという安心感が大きく、心の安堵を得られる。こどもの面倒を見てもらうというよりは、日々疲れ切っている自分が助かっている。「お母さんが笑顔だとこどもも元気」という言葉の通りで、自分の元気がチャージされると感じる。
- 継続して居てくれる地域子育て支援拠点のスタッフと話をすることで、精神的にほっとする。
- 行政保健師との面談設定やサービスの利用等の紹介において、地域子育て支援拠点のスタッフが間に入ってくれることがありがたい。

当事者ヒアリング結果概要

＜行政や民間・NPO等のサービス利用のきっかけと効果・課題＞

・ 現状のサービスに対する意見（行政による健診や窓口での対応について）

● 乳幼児健診や訪問時の行政担当者の対応で、嫌な思いをしたという意見があった。また、窓口や訪問の担当者が子育て経験者であることで話しやすくなるという意見が挙げられた。

- 自治体の乳幼児健診で、保健師から強い言葉を言われて非常に嫌な思いをした（発達の遅れを保健師に伝えたところ、「ここで診てみなきゃ分からない」とつっけんどんに対応された）。その後、小児科での定期健診でフォローしてもらい、行政の乳幼児健診は受診しなくなったが、自治体の男性職員が玄関のドアをドンドン叩いて大声で確認しにきた。玄関先で、健診未受診で虐待の恐れがあるため、こどもを確認させてくれと言われた。住居が社宅ということもあり、近所の目が気になりそこでも嫌な思いをした。
- 形式的な対応をされていると感じることがある。行政からの支援に応えることを強制されていると感じることがあり負担に思う。担当者が変更になり、再度状況等を説明しなければならないことも煩わしい。
- 説明した職員の方が年配の男性の方だったため、あまりその場で聞ける雰囲気ではなかった。保健師さんは話がやすかった。女性、子育て経験者だと相談しやすいと思う。新生児訪問の際は、子育て経験者の助産師が来てくれて、よくしていただいた。

・ 現状のサービスに対する意見（情報提供について）

● 情報提供の際の丁寧な説明や、事後のフォロー、担当者による情報量の差について意見が挙げられた。

- 妊娠中に、資料を渡されるだけでなく、口頭で説明をしてもらえると嬉しかった。また「こういうサービスがある」と言われても、体験していないのでよくわかっていなかった。
- 大量の資料をもらっても目を通す時間がない。
- 資源については、「困ったときはここに」というような一覧が、紙一枚程度でまとめられているとよい。
- 行政の保健師は情報を提供して終わり、サービスを使ってみてどうだったかという事後のフォローが少ない印象を受ける。
- 保健師が地区担当制のため、担当保健師の情報提供量の差によって、住民に届く情報量に格差が生まれていると感じる。同じ条件であれば、同じ情報を伝えて欲しい。担当者が変わって、引継ぎ等もしっかりされているとよい。

当事者ヒアリング結果概要

<国に求めること・要望>

・ 国への要望

- 子育てコミュニティを作るための支援や、就学への移行に関して情報を把握できる場やその周知へのニーズがあった。
- その他には、子育てに関する教育の充実、男性の育休取得を促進するための施策、相談窓口の一本化、産前・産後の各種手続きのオンライン化等の意見があった。

<コミュニティ作り>

- 夫が転勤族の妻は仕事を持ちにくいいため、専業主婦が多く、そういった方が子育て支援センターを利用されているように感じる。そのため人の移り変わりもあり、ママ友を作りづらい。ママ友作りもサポートしてもらえるとありがたい。コロナ禍のため、保育所の中でもママ友が作りにくい状況がある。子育てについて日々頑張っている、共感できる、戦友としてつながることのできるきっかけも欲しい。
- 母親同士の横のつながりをなかなか持てない。赤ちゃんに特化していなくてもよいので、大人と話がしたい、寄り添ってほしい人は多いのではないかと。ホームスタートのように、こどもの面倒を見てもらいながら母親の話も聞いてもらえるサービスがあるとありがたい。

<就学への移行>

- 就園から就学への移行に必要な情報を把握できる場が少なく、近所のママ友に個別学級のこと等の情報を聞いていた。あまりフォーマルな情報提供を受けていない。
- ママ友と話していると、放課後デイサービス等の情報は内容まであまり知られていないと感じる。周知が必要ではないか。また、利用待ちが20名程度あったり、配慮しなければならない子が通うタイミングは見学対応不可等、見学制限等があり、利用したくても利用できない状況がある。
- こどもが小学校、中学校になっても悩みを言える場があるとよい（発達障害がグレーの場合、周りからは気づかれにくく、またそれを公言している人も少ないため同じ境遇の人と共有することが難しい）。

<その他>

- 子育てがこんなに大変だと思わなかったと周囲の子育て中の人々が皆言っている。国の初期からの支援として、子育てに関する教育の充実や男性も育休を取得できる環境の整備等をしていただけるとありがたい。
- 相談窓口が1つにまとまっているとよい。こどもの面倒を見ていると手が空かないことが多いため、メールより電話の方が対応しやすい。
- 産前産後の手続きは、自治体窓口での申請が必要なことが面倒だと感じる。オンラインで申請ができるものがあるとありがたい。